

「再生」前夜—現代政治理論の創設神話について

蛭田 圭 (早稲田大学政治経済学術院)

二十世紀後半まで政治哲学は死んでおり、それが1971年の『正義論』の刊行により再生した—この「死と再生」という物語は、現代政治理論の生成と発展を語る際に、自明のものとして繰り返し語られてきたものである。しかしながら、この物語は果たして、客観的な事実に基づいたものなのだろうか。本発表では、「死と再生」という物語がその論拠としてきた二つのテキスト—ピーター・ラスレットの編書『哲学、政治、社会』への「序文」(1956年)と、アイザイア・バーリンの「政治理論はまだ存在するか」(1961/62年)—に焦点を当て、この物語が事実の描写ではなく、「現代政治理論」なる学問分野の境界線を警護し、一部研究者・機関・制度の利益と権益に仕する役割を果たしてきた神話であると主張する。より厳密には、「死と再生」の物語は、国家の創設神話といくつかの点で類似する意味で、現代政治理論の創設神話である。この神話の功罪を分析しつつ、政治哲学の脱神話化の可能性について考察する。

参考文献

Berlin, I., « La théorie politique existe-t-elle? », *Revue française de science politique*, 11^e année, n°2, 1961.

Laslett, P., et. al. (eds.), *Philosophy, Politics and Society*, 5 series, 1956, 1962, 1967, 1972, 1979.

Rawls, J., “Justice as Fairness”, *The Philosophical Review*, vol. 67, no. 2. 1958.